

# 鷗友学園女子中学校

2011年度

## 入学試験問題（2次）

### 【 国 語 】

時間 50分

### 【 注 意 】

1. 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題は全部で15ページあります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、監督の先生をよんでください。
3. 問いに字数指定がある場合には、句読点なども1字分に数えること。

受験番号	氏 名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十七世紀のスペインの田舎で育った十歳のバルトロメは、生まれつき背中に大きなこぶを持ち、足の短い不自由な身体をしていた。王女の馬車をあやつる御者として働く父に引き連れられて、一家でマドリッドに移り住んだ。田舎で暮らしていたときとはちがい、父はバルトロメの姿が目に触れるのを嫌って家に閉じこもるように命じていた。当時のスペインでは読み書きができる人は少なかったが、ある日バルトロメは、兄のホアキンから身体が不自由でも王の書記として働く人物がいることを聞かされた。自分も働ける望みを見つけ、父には内緒で読み書きを学ぶことを決心したバルトロメは、姿を見られないように洗濯おけに隠れてホアキンに運んでもらい、修道僧のドン・クリストバルのもとへ週二回通って勉強をしていた。

本文に登場するバルトロメの家族（父Ⅱファン 母Ⅱイサベル 姉Ⅱファナ 兄Ⅱホアキン 妹Ⅱベアトリス 弟Ⅱマヌエル）

「はい、わかりました！言葉と意味を両方おぼえるのですね！」バルトロメは勢いこんでいった。

ドン・クリストバルがにっこりした。この小さくいじけた体の中に、大きくひろがるうとするたくましいものがかくれているとは、なんとすばらしいことではないか！

この子はこれからきつと、みんなをおどろかせてくれるぞ。ドン・クリストバルにはそんな確信がわいた。

僧がバルトロメによりそってすわり、二人はいっしょに本を読みはじめた。ドン・クリストバルはバルトロメの知らないこと、知らない言葉をやさしくおしえる。耳で聞く音とくいちがったつづりに目をむけさせる。むずかしい言葉は石板に何度も書かせて練習させる。バルトロメは勉強に熱中して時間がたつのも気がつかない。やがて鐘が鳴って、僧が授業のおわりを知らせたときには、この前と同じように、一時間の速さが信じられなかった。そして、四日たたなければこのつづきはできないのだと、残念な思いがこみあげた。

ドン・クリストバルにもバルトロメの気持ちはよくわかった。

少し気がとがめながらも図書館へ走って、オーク材の大きな戸だなから数枚の紙、羽ペン、いっぱいしまったインキつぼをとりだした。このことについては、いつか院長に正直にいつてあやまるつもりだ。

その筆記用具をバルトロメにわたして、ドン・クリストバルがいった。

「これがあれば、家でも勉強できるね。もしなにかわからないことがあったら、この紙に書くといい。このつぎのときに、わしが説明してあげるから」

バルトロメはよろこびに目をかがやかせた。ペン、インキ、紙を布ぶくろにしていねいにしまいながら、これで自分も書記が使うのと同じ品物の持ち主だという思いで胸がいっぱいだった。

バルトロメのようすをながめて、ドン・クリストバルは思う。<sup>(注1)</sup>僧院の品をこうして持ちだせば、どろぼうといわれてもしかたがない。①それでもわしは、これからも同じことをするだろうな。

「ありがとうございます」バルトロメの声は興奮でふるえている。ドン・クリストバルをだこうとして腕をのばす。僧はバルトロメの高さに身をかがめる。僧服をとおして、バルトロメの胸の鼓動がどきどきとつたわってきた。

ホアキンがむかえにきた。兄と弟がでていつて、とびらがしまった。そのときもまだドン・クリストバルは、自分がバルトロメとだきあつたとき、相手を不自由な体の小さな子とは全然感じなかったことに、まだおどろいていた。

イサベルはバルトロメが持ちかえつた紙とペン、インキを見てびっくりした。よほどの金持ち、えらい人しかもたないこのような高級な品物を、どうして小さなわが子が手にしているのかと、そのことがふしぎだった。

「あなた、ほんとにこれを使えるの？」

バルトロメは本から目をはなし、学者のように落ちついて、母を見あげた。

「わからないことがあつたら、これに書きこむんだよ」

バルトロメはおごそかな顔つきで紙をいまいひろげた。インキつぼのふたをとり、ペンをひたして、よぶんなインキをしごきおとす。それから、おごそかに紙に字を書く。

まず「ドン・キホーテ」と書く。タイトルだ。その下に自分が読めなかつた言葉を書いていくつもりだ。

「パパとベアトリスがもどる前に、ちゃんとかくさなくてはだめよ」とイサベルが注意した。バルトロメはそれにうなずくのもそこそこに、また本に目をもどした。

バルトロメは母が夕食のしたくをはじめたことも知らずにいた。母の手で背中のごぶをそつつつかれて、ようやくあたりに食事のにおいがただよっていることに気がついた。

バルトロメはしかたなく、本と筆記用具を櫃ひつの中にしまった。

「早くあしたにならないかなあ」と心の中で願いながら。

夕食がはじまった。バルトロメは自分の考えにむちゆうで、ぼうつと前を見ている。フアナがこつそりとバルトロメをつついた。

「ちよつとどうしたの？」とバルトロメにささやく。「あんたがなにも食べずにぼんやりしてるから、パパがもう三回もあんたのほうを見たわ」

バルトロメはあわててパンにかじりつき、せつせと口をうごかす。

「いい知らせがあるんだ」フアナが得意そうにいった。みんながいつせいにその顔に注目する。

「ホアキンのことだね。今日パン屋の主人に会って、話を聞いてきた。ホアキンの仕事ぶりは申し分ないそうだ。あした、朝食をすませたらホアキンといっしょに行つて、徒弟契約をむすぶつもりだよ。<sup>②</sup> ホアキン、あしたからおまえは晴れてパン屋の徒弟だ」

ホアキンは父の言葉に大よろこびだ。自分は父の自慢まんの息子むすこなのだという思いが、誇ほこらしそうな顔によくでている。

バルトロメはすぐに自分のことを考えずにいられない。ぼくがちゃんと読み書きできるようになったら、パパはぼくのことも誇りに思ってくれるだろうなあ。

「ホアキンがいなくなるとこまるのはわたし」とイサベルがいった。「いろいろ手伝つてくれてたもの」

「そろそろベアトリスに家の仕事を手伝わせればいいだろう。もうこんなに大きいんだから」とフアナがいい、ベアトリスがふくれっ面になった。

お手伝いなんていやよ。遊ぶほうがよっぽど楽しいんだもの。そう言いたいんだけど、いえばあとがおそろしい。

「そうよね。六つのときには、わたしもう縫い仕事が出来たわ」とフアナが口をだす。下の妹があまやかされていると思っっているから、どうしても自分の小さいときとくらべたくなる。

一人、バルトロメだけは体をこちこちにしてすわっている。このことがぼくにとってどんなに重大か、だれもわかってくれな  
いんだ。ホアキンが家からでていけば、ベアトリスがお手伝いのために家にいる時間が長くなる。そうしたら、ぼくはかくれて  
勉強することができない。つぎの瞬間、バルトロメの背すじに冷たいものはしつた。それよりにより、ホアキンはこん  
でくれなくなったら、ぼくはどうやってドン・クリストバルのところへ行けばいいのだ？

バルトロメの腕と脚がふるえはじめた。フアナが不愉快そうににらんでいる。しかしバルトロメはふるえをおさえることがで  
きない。顔の筋肉もひきつって、顔がゆがんでしまった。あいた口からよだれがながれる。

「おまえはもう寝るんだ」フアナがきびしい声でいった。イサベルが椅子からとびあがって、バルトロメを小部屋へつれてい  
く。マットレスをひろげ、バルトロメを寝かせて、ひくひくする体を毛布でおおう。

「きつとしょっちゅう会いにくるわよ」とイサベルがバルトロメをなぐさめた。

バルトロメは母から顔をそむけた。

会いにくるだって！ ぼくに必要なのはホアキンのかるやかな脚。そして力持ちの背中だ。それがなくては、ぼくは家からで  
ることもできない。

フアナがドアのところへきた。

「わしにはわかっていたんだ。マドリードはバルトロメのいる場所ではない。村にいれば、けいれんなどおこすはずがないの  
だ。旅行の許しが出しだい、この子を村へもどすでしょう」

イサベルはなにもいえない。毛布の上からでも、バルトロメの体がひくひくしているのがわかる。フアナのいうとおりかもし  
れない。この生活は、バルトロメには刺激がすぎるのね。そういうことなら、バルトロメ本人にも村へもどるほうがしあ  
わせなのでは？ そう思うイサベルの心の底に、フアナに隠しごとをしているのがつらくてたまらない気持ちがひそんでいる。

つぎの朝、ホアキンがバルトロメのマットレスの前で、もじもじしていった。

「ぼくはこれから出かけるよ、バルトロメ」

ホアキンはわきに着がえをいれた包みをかかえている。

バルトロメはおきずにいる。朝食も食べたくない。イサベルがバルトロメをつれてこようとしたのだが、ファンがとめたのだ。 「ほっとけ。腹がへればでてくるさ」

あまりにも急にきまってしまった。ホアキンは毛布にくるまったバルトロメを見おろしながら考える。

バルトロメにすまないと思ういっぽうで、ホアキンは父といっしょにパン屋へ出かけるのがうれしくてたまらない。一族のなかで職人の徒弟になれるのは、この自分をはじめてなのだ。ほかはみな貧しい小作人ばかり。ホアキンはマドリード一のパン職人になるうと決心していた。ひよっとしたら王宮の御用達<sup>ごた</sup>パン屋になることも、夢でないかもしれない。

バルトロメはホアキンにさよならをいわなければならぬと、よくわかっている。これから何年ものあいだ、この兄にはめつたに会えなくなるのだ。しかし、今この瞬間、バルトロメは兄をにくんでいた。

バルトロメは、苦々しい思いをかみしめる。自分にとってはいいことでも、このぼくにとってはどんなにつらいことなのか、ホアキンは考えてもくれない。手に職をつけるために家をでるにしても、もうしばらく待つてからでもよかったのに。それなのに、さっさとすぐにでていってしまう。それは、ぼくが同じように身をたてるための、たった一つの夢をぶちこわすということなのだ。

バルトロメはホアキンと口をききたくない。顔も見たくない。

ホアキンがマットレスのそばにしゃがんだ。

「ごめんな」と毛布のかたまりにむかってささやく。「でもこれは前からきまっていたことなんだ。ぼくはこれまで見習い修業中で、家からかよっていた。だけど徒弟になって契約をすませば、どうしてもパン屋に住みこまなければならぬんだ」

ホアキンはつらい気持ちで毛布の上をなでた。バルトロメをかなしませたままで出かけたくはなかった。

「おまえはあの厚い本さえ読めるようになってる。字だって、だいたい書けるんだ」

バルトロメは体をかたくして聞いていた。

「ドン・クリストバルのところへはぼくが行って、おまえがこられなくなったことを話しておくよ。そうすれば、ドン・クリス

トバルはおまえがなまけて勉強をやめたとは思わないだろう。バルトロメ、おまえはすぐ頭がいいんだ。ドン・クリストバルにたすけてもらわなくても勉強をつづけられるよ。ぼくにはわかっている」

バルトロメはすすり泣きをこらえる。

「もしも休みがとれたら、そのときはおまえをドン・クリストバルのところへはこんであげる。約束するよ。だから、わからないことは紙に書いておいて、そのとき聞けばいい」

ホアキンは立ちあがり、そのまま待ったが、バルトロメの返事はない。ホアキンには、バルトロメに自分の言葉が聞こえてくるのかどうかさえわからない。

「ぼくはおまえのために、できるだけのことをした」ホアキンががっかりしていった。「でも、おまえからは一度もありがとうといってもらえなかった」

すると毛布がうごいた。バルトロメが泣きはらした顔をつきだした。歯をくいしばっている。

「兄さんははじめ、ぼくがいっぱしの人間になれるようなことをいった。そして今さっさと行ってしまおう。ほんとのところは、ぼくをだましていたってことだね！」

③バルトロメ自身、それがひどい言いがかりだと知っていた。そしてホアキンがバルトロメの言葉をつらくうけとめていることも、その表情からよくわかっていた。それなのに、バルトロメはさらに、おいかぶせるようにいつてしまった。

「だから、兄さんなんかきらいだ。もう顔も見たくない。行くんならさっさと行けば。ぼく、もう兄さんなんかいらぬい」  
ホアキンはだまって小部屋をでていった。

居間のドアがしまると、バルトロメはこらえきれずに泣きだした。ホアキンを追いかけてあやまりたかった。

フアナがはいってきて、バルトロメのそばにすわった。バルトロメの頭をだきあげて自分のひざにのせ、そっとバルトロメの頭をなでた。そして低い声で即興そくの歌をうたってなぐさめた。バルトロメの泣き声が小さくなり、間遠になり、やがてやんだ。

「あんたが自分でおとなしく勉強するって約束してくれたら、わたし、あんたをドン・クリストバルのところへはこんでいく方法を考えてみるわ。そうねえ、二週間くらい待ってくれない？」

バルトロメは頭をもたげた。

「おけは重いよ。ホアキンは姉さんよりずっと力があつた。それでもかつぐのは大変だったんだ。できもしないことはいわぬい

で」

フアナの顔は真剣だ。

「あんた書記になりたいの、なりたくないの？」

「なりたいにきまつてるじゃないか。でも……」

「でもは言いっこなし！ さあ、本をひらいて勉強なさい。どんな時間もむだにしてはだめ。ベアトリスを井戸まで水くみに行かせるわ。そうすればそのあいだだけでもベアトリスは家からいなくなる」

バルトロメは姉を見あげた。男と女のちがいはあるけれど、フアナのきつぱりした言いかたはパパと同じだ。自分にも、そのことがわかっていいるだろうか？

フアナが小部屋をでていった。バルトロメはマツトレスからはい出た。おけの水で顔と手をあらい、ていねいにふいてから、本、紙、ペンとインキを櫃からとりだした。本をひらいて読みだしたが、フアナの顔が目の前にくりかえしあらわれる。フアナはほんとにぼくをドン・クリストバルのところへつれていってくれるのだろうか？

どれだけ考えても、それは今のバルトロメにはわからない。新しい紙をだして、ペンをインキにひたした。そして書きつけた。

「フアナがぼくをたすけてくれる。フアナはぼくに約束した」

白い紙に黒々と書いた字を見ると、フアナの約束がほんとうに実現しそうな気がしてくる。

しかし、このことで大事な紙を一まい使ってしまったものだろうか？ ままよ、書いてしまっからくよくよしてもはじまらない。

「ぼくはフアナが大好きだ」とその下へつけくわえる。

ではホアキンは？

「ホアキンはぼくを見すてた」バルトロメはむりに自分に言いきかせた。

それはちがう。心の中でささやく声がする。バルトロメはペンをあらためてインキつぽにひたし、文章を書きはじめた。心の

奥底おくにこもっている思い、悩みなやをつぎつぎと文章にして書いていく。すべてを書きおわると、自分でもほっとした気持ちになった。それがホアキンに対するおわびにもなるような、そんな気がするのだ。

紙の下のほうが三分の一ほど白いままだ。文章は思いかばない。そこで以前、村の広場で砂の上にかいたように、絵をかくことにした。細い線でフアナが自分をなぐさめてくれるところ、ホアキンが重い洗濯おけをせおっているところをかいた。ベアトリスは井戸から家へ水をはこぶところ、マヌエルは母の腕にだかれているところだ。

絵をかくほうが、文章よりもずっとやさしい、とバルトロメは思う。文章でどうという言葉を使えばいいかわからないことでも、絵なら目に見えるかたちでかきあらわすことができる。少しためらってから、紙のいちばん下にフアナの絵をかいた。(注2)お仕着せの御者服すがただ。その下にはっきりした字で書きつけた。

「ぼくを村へもどさないで」

それは祈りいの、願いだった。

バルトロメは、(4)その紙を折りたたみ、床ゆかのすきまにさしこんだ。

(ラヘル・ファン・コイ著 松沢あすか訳 『宮廷のバルトロメ』)

(注1) 僧院……修道院のこと。中に図書館や研修所などをもつ。

(注2) お仕着せ……主人から使用人に与えられる制服。

問一 — 線部① 「それでもわしは、これからも同じことをするだろうな」とありますが、なぜこのように思ったのですか。説明しなさい。

問二 — 線部② 「ホアキン、あしたからおまえは晴れてパン屋の徒弟だ」について。

(1) ホアキンが「パン屋の徒弟」になることが、バルトロメは自分にどのような影きようをおよぼすと考えましたか。説明しなさい。

(2) (1)のように考えたことから、バルトロメはさらに自分の将来がどうなると考えていますか。簡潔に答えなさい。

問三 — 線部③ 「バルトロメ自身、それがひどい言いがかりだと知っていた」とありますが、なぜバルトロメは「ひどい言いがかり」をつけたのですか。バルトロメの兄に対する気持ちもふくめて八十字以内で説明しなさい。

問四 — 線部④ 「その紙」に描かれた絵から、バルトロメの家族に対するどのような思いが読み取れますか。「フアナに対する思い」と「フアンに対する思い」とのちがいを、根きよをあげて百字以内で説明しなさい。

このページに問題はありません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A

ある平野に水田をつくるとしましょう。

水田の水の多くは川から引いてくるので、川の近くにいくつかの農地や集落ができます(図1)。水路を引く場合、川の流れを木の枠組みや石などでせき止め、そこから田んぼへつながる水路へ水を送ります(図2)。この仕組みを堰せきといいます。

ある川で、1の集落(水田)がすでに川に堰をつくり、水路を引いておきます。そうすると、後から2の集落が水田を開発する場合、1の堰の下流から引くことになり、なぜなら、川の水を引くのは、濁水かっの時上流のほうが有利であり、2の水田集落は1の堰の、いわば余り水をもらって水田をつくる他ないわけです。

さらに同じように、3の集落は2の堰の下から引くことになります。こうやって川の水の量に余裕ゆゆうがある限り、水路が引かれ、水田がつけられていきます。

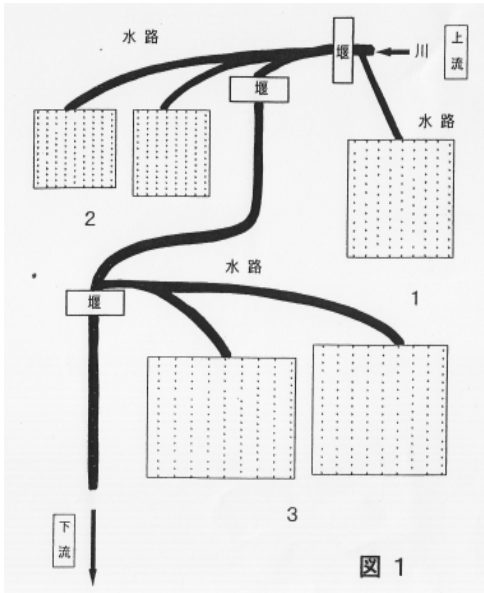


図 1

このようにして、その平野は、川から引ける水の量のギリギリまで開発されることになります。ところが、川の水量は常に変動します。雨が降れば水かさは増し、日照りが続けばだんだん減ってきます。

さて、ここで集中豪雨が来たとき、たちまち川は濁流だくとなつて、堤防ていぼういっばいまで水かさが増します。このとき、堰が頑丈がんじょうであればあるほど洪水こうすいは水路のほうへ流れてきます。むしろ、流されてしまうくらいの粗末そまな構造のほうが望ましいことになります。

昔の堤防はそれほど頑丈ではないので、水路を引いたところから崩れてきます。そして、こともあろうに自分たちが苦勞して掘った水路をつたって、洪水がおそいかかってくるのです。川のそばほど多くの集落がかたまっています。悲劇ですね。

今度は、日照りが続いたとします。川の水かさは日に日に減っていきます。上流の村はできるだけたくさん取ろうとします。すると、下流の村には全然水が流れてきません。日照り続きで、稲も弱ってきました。稲が枯れるということは、一年間の収入もゼロになるということの意味します。下手すれば、村中が全滅です。

さあ、皆さんならどうします？ ……上流の村に分けてもらおう？ いえいえ、上流も必死です。……水が余っているわけではないのです。

## B

水をめぐる争い——いわば集落全員の生死をかけた争いです。待っても待っても雨は降らず、太陽がジリジリと照りつけます。土にヒビが入って稲も枯れはじめます。どこかの集落が耐え切れず、夜中に上流の堰を壊しに行きました。村中が殺気立ちます。人びとは手にカマやクワを持って集まり、戦国時代さながらに川を挟んでの乱闘がはじまります。

そう昔のことではありません。犬上川（滋賀県）では昭和七年、「農民四百余名竹ヤリかざしてにらみあう」と新聞でも大きなニュースになりました。十数名の犠牲者を出し、三百人あまりの警官隊が三日かけてようやく騒ぎが収まりました。道徳や理屈などで解決できる問題ではなかったのです。

あるいは、高時川（滋賀県）では、極端な渇水に見舞われたときは、下流の村人数百人が白装束に身を包んで上流の堰を壊しに行くという、戦国時代から昭和十八年まで続いた「餅の井落し」という奇習があります。これは流血の惨事を避けるための農民の知恵であり、四百年の間に儀式化していったものでしょう。

しかし、この水は多すぎても困ります。渇水にも増してたいへんだったのは洪水時でした。とくに琵琶湖は約四百六十本もの川が流れ込む全国一の水瓶。しかも、出口は瀬田川一本だけ。大雨が降ると琵琶湖の水かさが増し周辺数千ヘクタール、時には一万余ヘクタールの農地が何度となく水の底に沈みました。といって、流れを良くするために瀬田川の川底を掘れば、今度は下流の大阪に洪水が押しよせます。推古天皇（六二三年）以来、明治元年まで、記録に残る淀川の洪水は二百三十九回。ほぼ五年に

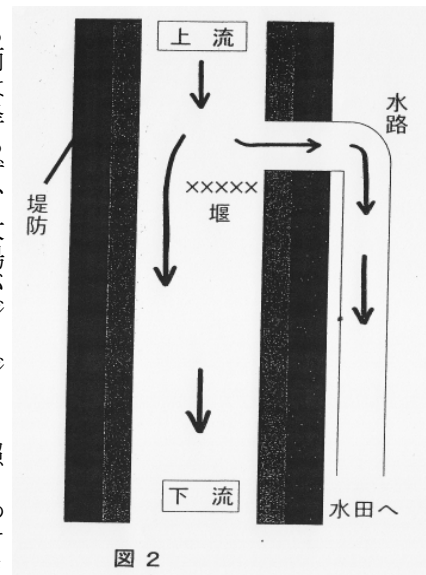


図 2

一度の割で起こっています。

新潟平野の西蒲原<sup>かんばら</sup>地方では「三年一作」と言われていました。信濃川などの洪水によって、まともに米が収穫<sup>かく</sup>できるのは三年に一度だったという意味です。

水ばかりではありません。山林も大きなエネルギー源ですから、その境界や使用をめぐっては大きな争いとなりました。例えば、秀吉の時代ですが、滋賀県日野町周辺の山争いは、何十年と続き、遂<sup>つい</sup>に江戸時代、それぞれの代表が神社の前に歩み寄り、まつ赤になるまで焼かれた鉄の斧<sup>おの</sup>を長く手に持っていたほうが勝ちという方法で決着をつけています。

こうした記録は、多かれ少なかれどの村でも残っています。何百年におよぶ水争いや山争いを通して、さまざまな約束事ができたり、証文が交わされたりして、村々の「農」をめぐる秩序<sup>ちつ</sup>ができ上がっていったのです。

したがって、この厳しい水利秩序のなかで新田を開発する（新しい水路をつくる）ということは、他の村にしてみれば自分たちの水の分け前を取られるわけですから非常な困難<sup>とみな</sup>を伴いました。しかも、水利の容易なところはすでに開発されていたので、トンネルを掘ったり、谷を水路橋でまたいだりと大変な難工事を強いられました。

水路開削<sup>さく</sup>者の多くは、資産を使い果たし、家に火をつけられたり、一家離散<sup>りさん</sup>の目にあうなど地獄<sup>じごく</sup>のような人生を歩んでいます。なかには、礫<sup>はりつけ</sup>台を立て、決死の覚悟<sup>覚悟</sup>で挑<sup>いど</sup>んだ庄屋<sup>しょうや</sup>たちもいます（長野県安曇野<sup>あづみの</sup>や福岡県うきは市など）。

さて、いずれにせよ、日本の「農」は水との闘<sup>たたか</sup>いであつたと言つても過言ではありません。現在では、このような争いはみられません、それは過去にこうした厳しい秩序ができ上がってきたからなのです。したがって、この秩序は、水利システムをコンピュータで操作する現在でも変わっていません。

今でも大湯水になると、江戸時代の古文書の証文にしたがって水を分けたりする地域はたくさんあります。

（金子照美『誰もが知っているはずなのに誰も考えなかった農のはなし』）

※本文には一部省略したところがあります。

問一 Aの文章で述べられている「堰」をつくる際の工夫を、その目的もふくめて答えなさい。

問二 Bの文章で述べられている「新田開発」を行う際に生じる問題点のうちから二つをあげ、それぞれ説明しなさい。

問三 ——線部「今でもくあります」とありますが、どのような目的から「江戸時代の古文書の証文」にしたがうのですか。人々がしたがうようになったいきさつもふくめて、説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 交番に、イシツ物を届ける。
- (2) スデでつかむ。
- (3) 作品をヒヒヨウする。
- (4) 科学技術のコウザイについて考える。
- (5) これは当然のキケツだ。

